



2001年9月30日発行  
 日本聖公会東京教区  
 港区芝公園3 6 18  
 編集人 伊藤 裕元

【教区フェスティバル特集 - 主教説教】 2001年9月15日・香蘭女学校講堂

## 神の代理人

主教 植田仁太郎



主教という恐れ多い職務を与えられて五ヶ月になろうつとしています。前主教竹田主教の強いお勧めが教区であるメリーランド教区を訪問し、教区の方々、また、教区主教のイーロ主教と親しくお交わりする機会を与えられました。私たちの姉妹教区では、主教たる者はどういう役割をどのようにこなしていらっしゃるかと、ちよつと勉強して来いという竹田主教の私に対する親心だたと思えます。それで、教区会で三〇〇人ぐらゐの聖職や信徒の方々がお集まりの折りに、挨拶をさせられましたので、イーロ主教から色々なことを学ぶつもりで、このついでに

参りました。しかし皆さんからはイーロ主教のこつこつ所をマネしてはいけないといつ所をせひ教えていただきたいと申しましたら、会場から大喝采を受けました。新米主教として、皆さんにも同じことをお願いしたいと思えます。「竹田主教のこつこつ所はマネをしてはいけない」といふことを教えていただきたいと思えます。

いすれにしましても、誰も、他の主教方も、主教といつものはこうあるべきですといつことを教えてくれない、あるいは、あいつは、言うてもとても聞かないだろうと、あきらめられているのかも知れません。それで、今のところ、せめて大変尊敬しております竹田主教ならおつと努めている次第です。竹田主教は二二年余にわたつて教区と私共を指導してこられて、数々の貢献をして下さいましたから、少なくとも、それを充分に引き継いでゆかなければならないと思つています。もう

とも、この場合は、教区会の演説の場では

ありませんので、引き継ぐべきことのひとつには立ち入りませんが、多分、竹田主教も、就任早々の頃は、教区全体をどういつ姿勢にすることが、神の御心に叶うことになるのか、ずいぶん祈られ、そして考えられたのだらうと思つています。最近、教区の宣教委の方々から教えられたことですが、竹田主教が就任なさつてすぐに出席されたラベンス会議（一九八八年）から、いろいろなトヤ洞察を得られたようです。ラベンス会議といつのは、存知のように、全世界の聖公会の主教が一同に会する一〇年に一度の会合です。竹田主教は就任間もなくこの会議に出席されています。

で、私もそれにあやかろうつと、その一〇年後つまり、一九九八年に開催されたラベンス会議の報告書といつのを読み始めました。いつい最近二年越しの翻訳作業が終わつて、日本語にもなつてきます。全世界の主教さん、恐らく五六百人といつ数になるのではないかと思つていますが、約三週間かけて討議したこと

報告書なんですがまあ決して読み易いものでもないし、読んでいてワクワクするという読み物でもないで、あまりおススメできません

が、主教といつのはあるいは教会といつのは、とにかくも多方面に注意を向けなければならぬのかと、呆然としてしまつてほごころんなことを討議しております。そして何と二〇七項目にわたる決議を採択しております。その決議は、聖公会の教義や礼拝についてはかりではなく、世界情勢のあれこれ、世界経済や社会問題、世界人権宣言や核問題、安楽死やホモセクシアルの問題、他の教会や他の宗教との関係についてなど、あらゆる分野にわたっています。そのあらゆる問題に、

神さまの導きを祈り、神さまの御心に叶う教会の働きができるように各教会に励ましを与えています。リンパ入会議といつ聖公会の全主教が集まる会議は、まさにできる限り、神さまの意志をこの世界で神さまに代わって実行しようとしていようとしています。私たちが神さま

の忠実な僕となつていふ努力の中で、そうしているのだと思えます。

と、この今日福音書を選びましたルカ福音書の一節はこの神の忠実な僕とはどうあるべきかについて、イエスが語られたたとえ話が伝えられています。

イエスのたとえは、いしもそうです。が、前後の関係なく、一種の永遠の真理を易しく解説したといつ形ではなく、必ずある人間関係や社会的関連の中で、その場にふさわしい教訓として語られます。い、どこにでも通用する格言としてではなく、ある特別な場面への特別な教訓といつ意味でたとえ話が語られています。ですから、それと似たような場面、似たような関係の中で、現代にも意味があるのです。永遠の真理であるから、現代にも通用するのではなくて、現代にも同じような場面があるので、イエスのたとえ話が現代にも通用する真理となつてゆくのです。

先程読みましたたとえ話は、マルクによる福音書に記録されているものを読みましたが、同じたとえ話をルカは、もうちやうと想像力を働かして書き改めています。それにより、まずこのぶどう園の農夫のたとえは、「民衆」に対して語られています。が、実際にこの話を聞かせたい相手は、民衆ではなくて、民衆の中にまじって聞いている律法学者や祭司長たちです。この話の最後のところ、そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当をつけてこのたとえを話されたに気づいたので、『ルカ20・19』イエスが手を下そうとしたと書かれていますから、イエスは一般の民衆に話すような格好をしながら、律法学者や祭司長たちを批判した、といつことになつてい

う。その律法学者や祭司長たちを批判することになつたたとえといつのは、このいづつことでした。ぶどう園の主人が収穫の時期になつたので、ぶどう園に働いている農夫たちの

所へ次々と使者を送り込みます。ところがその農夫たちはそんな使者のことなどまるで聞かずともしない、そして、い主人は息子を送り込みますが、農夫たちはその息子に従つてころか殺してしまつた、といつストーリーです。そして、これは典型的なイエスの語り口ですが、「だから、いづついなさい」とみずから教訓を仰有るのではなくて、

「さて、皆さんは、この物語をどう受け取るだろうか？」と聞いている人々に問いを投げ返します。『ぶどう園の主人は、このとんでもない農夫たちをどうするだろうか？』といつのがイエスの問いです。つまり主人の代理人である使いの者や息子を無視したり、いじめたり、殺してしまつた農夫たちを、主人はどう扱つたらうかといつのが問いです。今、私は主人の使いや息子を、代理人と呼びましたが、実は農民自身も主人の代理人であるわけですから、ぶどう園を主人になり代つて、面倒を見るように命じられ雇われているわけですから、ぶどう園の運

営を任ざれてゐるといつて点ではやはり、ぶどう園の主人、オーナーの代理人に違いありません。ですから、一群の代理人が、同じ主人から遣わされたもう一群の代理人を無視したり、いじめたり、殺してしまつた場合、その主人は、どういつ手を打つたか、といつのがこの物語をおしてのイナスの問いです。

そして先程申したように、「この物語を聞いていた」律法学者や祭司長たちは、イナスが自分たちに打つけたとえ話をされたとき、気が付いたので、「イナスに手を下すとした」と記されています。つまり傍若無人に振舞つた一群の代理人といつのは、お前達のことだぞ」とイナスが指摘されたので、律法学者・祭司長たちはカーツときたわけです。何故カーツときたのでしょうか。何故、そいつともある「ナ」と軽く聞き流せなかつたのでしょうか。

第一に、律法学者・祭司長たちは、自他ともに認める、神の代理人「だ」といつて確信があつたからで

す。律法をおして与えられた神からの規範に、誰にも優つて最も忠実に、そして厳密に従つてゐる自分たちこそ、神の代理人であると確信を持つてゐたからでした。

第二に、だからこそ、そいつ自分達に神がもう一群の他の代理人を差し向けてとやかく言つてくるといつて、これはあり得ないと、これまた確信してゐたからでした。自分たちこそ、神からぶどう園の運営の一切を任ざれてゐる代理人



だから他の代理人と称する者たちにとやかく言われる筋合いではないと、自信を持つてゐたからでしょう。彼らが怒つた決定的な第三の理由は、イナスがみずから投げかけた問いにあるヒントを与へたからでした。そのヒントといつのは、主人はこの農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」といつのがそれです。「殺す」といつのは、穏やかではありませんが、要するに、ぶどう園管理の代理人の総入れ替えといつ手を打つてくるのが普通じゃないかな」といつのが、イナスの与へたヒントです。

ある一群の代理人が主人の言うことを聞かず、反抗してくるなら、その代理人たちをクビにして、総入れ替えするといつのが普通じゃないかなと仰有います。つまり律法学者・祭司長たちは、神の代理人であるといつ特権を剥奪されることになるのが普通じゃないかなと仰有つたからカーツときたわけです。

教会の伝統的なこのたとえ話の解説は、ここで終わつてしまひます。そつだ、そつだ、イナス様の言つとおりだ、律法学者・祭司長たちは、イナスキリストの福音を理解しようと思つて、ついには神の御子であるイナスキリストを十字架に付けて殺してしまつたんだから、もう神の代理人ではなくなるのは当然だ、イナス様はそれに代つて、「サヤ教指導者たちを総入れ替へて、イナス様に従つて教会をその代理人にして下さつたんだ」といつて解釈しました。この解釈は本当にそれでいいのでしょうか。

「神の代理人」これは、ローマ法王に対して世俗の世界がやや皮肉を込めてつけた称号です。ローマに在住して、ローマ史やイタリア史に題材をとつた沢山のノンフィクションを書いてゐる女性の作家で、塩野七生といつ方があり、私は大好きですが、その方が歴代のローマ法王の物語を書いた本の名前も、神の代理人」といつタイト

此です。自他共に「神の代理人」としての役をこの世界で演じているのがローマ法王だといつわけで、ローマカトリック世界とその影響のもとにある人々にしてはまさにそのとおりでしょう。それはイエスがペトロに対して、あなたはペトロ、わたしはの岩の上に教会を建てる…わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。(マタイ16:18-19)と仰られたといつ故事に、その起源があるので、すが本当にイエスがそつ仰られたのかどうか、現代の新約学者はかなり疑わしいとらんでいます。

いずれにしても、見事、教会は「律法学者・祭司長になり代つて、「神の代理人」の座に着くことになりました。」ローマカトリック教会だけが法王を中心に神の代理人になり代つたといつわけではありませぬ。プロテスタント教会も、ただ法王だけが「代理人」だといつのはおかしい。怪しからんと言っているだけで、自分たちも牧師や長老を中心に、いわば神に代つて神のみこたばを發する神の代理人だと主張

しています。

わが聖公会は、主教たちこそイエスの使徒の継承者で、神と信仰にかかわることを一切代行しているつまり神の代理人であると暗に主張しています。先の中聖公会の主教たちの会議であるランベス会議は、そつあるとつとする姿勢がありありと見えます。

しかし果たしてそつでしょうか。先程、イエスのたとえ話の真実は、今日も同じよつな状況があるから、今日にも、あるメッセージを伝えているのだと申しました。そついつ意味で「このたとえ話を謙虚に読めば、神は一旦定めた神の代理人たちの他に、他の代理人を次々と任命して神の命令と意志とを伝えるものだ」といふことを教えています。仮に、教会が神の代理人といつ役割を与えられているとしても、神はいつでも、その他の代理人をいくらでも派遣なさる方だといふことを、まます言っていると思います。そして、もつもつとの代理

人が、新たに派遣された代理人を無視したり、いじめたり、追い返したりした場合には、神は平気で、もつとの代理人をクビにして、総入替してしまつよつな方だといふことも言っていると思います。

今日、私たちは、教会に連なりつよつさらに社会との関わりの中で、様々な奉仕をされている方々やグループを憶えよつとしています。その方々は、その活動の中で、教会では聞くことのできなない声や叫びや訴えを聞かれることも、あるでしょう。教会の方々は、全く異質な環境で生きていらつよつ方々と接することもあるでしょう。今までの自分の生活の中で感じたことのない悩みや喜びを、持つていらつよつ方と出会うことも、あるでしょう。

神はいつでも、いろいろな代理人を私達のとつに、寄こします。その代理人は、他の宗教の衣を着けているかも知れませぬ、他に頼るとつもの無い、怪し気な外国人の装いをして、いるかも知れませぬ、どこにても、いらつよつる子育てに悩んでいる母親

の姿をしているかも知れませぬ。そして、私たちが、そつである、と確信している代理人、あるいは、僕の努めを果たしているかどつかを、問い質します。

今日のイエスのたとえ話は、教会の在り様を正当化するための話ではなくて、私たちに反省を迫る話だと思ひます。私たちが、神の代理人の役を果たせぬ時には、神さまはいくらでも、他のグループ、他の宗教、他の人々を、神の代理人としてお立てになるといふことを示しており、ます。

ランベス会議に集まつた主教たちが、凡そこの世界のあらゆる問題について、発言し、また、祈り求めざるを得なかつたといふことは、そついつ神さまへの、ひとつの、応答をしようといふ努力だと、信じております。東京教区に、いらつよつる各教会が、神さまから、託された、努めを、果たしつよつな、お、次々と、送られてくる、神の代理人の、声を、良く、聞く、そついつ、教会、になつて、ゆきたい、と思ひます。

(一)